



(桜井)

奈良・藤原京跡右京一条一坊

ふじわらきょう

- 1 所在地 奈良県橿原市醍醐町
- 2 調査期間 一九九八年(平10)一〇月～二月
- 3 発掘機関 橿原市教育委員会
- 4 調査担当者 露口真広
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代、七世紀末～八世紀初頭、中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

今回の調査は、大型店舗建設に伴う事前調査で、調査地は耳成山の南三〇〇m、山の東裾を迂回する米川から南に二〇〇mの位置にある。右京一条一坊東北坪

の宅地部分に相当し、北は横大路、東は朱雀大路の北延長部という二本の幹線道路に面した重要地点である。隣接する西北坪内では、和同開珎や富本銭、鍛冶・鑄造関連遺物などが出土している(奈良国立文化財研究所

「藤原京右京一条一坊発掘調査報告」一九九七年。

調査は南北五〇m東西四〇mの北調査区、南北八m東西二三mの南調査区を設定して実施した。南調査区は西一坊坊間路の検出に主眼を置いた調査区で、道路側溝の可能性がある南北溝二条(溝心々間距離五m)を検出した。

北調査区では中世以降の耕作溝、藤原京期の掘立柱建物一三棟、井戸六基、土坑一一基、汲み取り式トイレ遺構二基、斜行溝、落ち込み、弥生時代後期の土坑などを検出した。掘立柱建物は調査区の北五分の三に分布する北群と、南五分の一に認められる南群とに分類でき、両建物群の間には簡易な閉塞施設として一本柱塀が通る。

北群の建物一〇棟には建て替えが認められる。柱穴・ピットの類は北群一帯に多数分布しており、小規模建物が密集した状況がうかがえる。

木簡は井戸二から一点出土した。井戸二は北群に属し、直径二・八m深さ一・二mを測る。法面には井戸枠解体に伴う再掘削時の崩落によって生じたオーバーハングが全周にめぐる。井戸内の土層は、井戸枠抜き取り後の埋め戻し土(上層)と、法面下半に薄く堆積した砂層(下層)とに分かれ、ほとんどが上層で占められる。上層から軒平瓦・軒丸瓦、須恵器・土師器などがまとまって出土した。木簡は数少ない下層の遺物で、法面に押しつけられたような状態で出土しており、井戸枠内に投棄されていたものが押し流されたか、埋

め戻し時に混入したとみられる。

木簡以外の出土遺物は、須恵器・土師器、瓦、土馬、斎串、井戸枰などである。隣接する西北坪内で顕著だった鍛冶・鑄造関係遺物は全く出土しなかった。坪ごとに性格の異なる施設が分布する地域と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

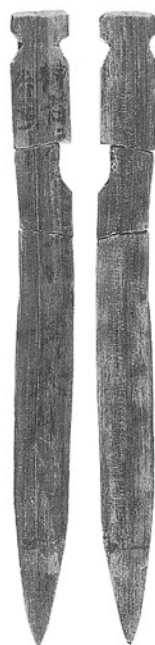
(1)

・く神首
各田マ斗斗伍升并六斗

190×19×4 0.03

上端に切り込みを入れ、下端を失らせた荷札木簡。左側面に一部欠損があるが、ほぼ原形をとどめる。全体は現状で三片に分離している。表面には貢進地名が書かれていた可能性が考えられるものの、墨痕が薄く釈読できない。裏面は、上部に二行にわたって人名と貢進物の容量を記し、下部中央行にやや大きめの字で合計量を記す。

「六斗」は庸米貢進荷札にしばしばみられる貢進量であることから、本木簡もその可能性が高い。庸米荷札では貢進者二人が各々三斗の米を輸し、合わせて六斗に成俵する例が多いが、平城宮跡から出土した庸米荷札には、二人の貢進者のうち一人が三斗、一人が二斗の米を輸すものや（美濃国山県郡。本誌第五号一(9)、同一郷の異なる里（コザト）から輸された四斗五升と一斗五升の米を合わせて六斗と



するもの（備中国手田郡。本誌第七号一(17)）などがある。本木簡は一人あたりの輸貢量が不明だが、右行は斗五升、左行は残画から一斗斗升か二斗斗升の可能性がある。したがって、神首某が四斗五升もしくは三斗五升、額田部某が一斗五升もしくは二斗五升の米を輸し、六斗に成俵したものであろう。なお、神首氏は天平十一年（七三九）の備中国大税負死亡人帳にみえ、備中国の荷札の可能性が考えられよう。

9 関係文献

露口真広「藤原京右京一条一坊の調査」（橿原市千塚資料館「かしはらの歴史をさぐる 七 平成一〇年度埋蔵文化財発掘調査成果展」、二〇〇〇年）

（117・9 露口真広、8 竹内 亮〈奈良文化財研究所〉）